

ナシ「あきづき」の高接ぎ更新に利用する中間台の適否

ナシ「あきづき」の高接ぎ更新には、「新高」、「豊水」いずれを中間台に利用しても樹の生育、収量、果実の肥大、品質には大差がないことから、両品種ともに中間台として利用可能である。

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室 (担当者: 大崎伸一)

研究のねらい

平成13年に県推奨品種になった「あきづき」は、果形や食味が良好な赤ナシである。本品種は苗木とともに高接ぎでの導入が進められているが、中間台品種が収量や果実品質に及ぼす影響は明らかでない。そこで、中間台品種の影響を明らかにし、「あきづき」を高接ぎ用で導入する際に中間台品種の影響を明らかにし、その適否を判定する。

研究の成果

1. 高接ぎ5年目(結実開始から3年目)における樹冠の拡大は、「新高」中間台が「豊水」中間台より、若干良好な傾向にあるが大差ではない(表1)。
2. 果実の肥大は、樹冠占有面積1㎡当たりの着果数を考慮すると両品種中間台による差はない。また、糖度、樹冠占有面積1㎡当たりの収量も明らかな差はない(表1、表2)。
3. 高接ぎ5年目(結実開始から3年目)収穫終了後における枝の伸長や腋花芽の着生にも大きな差はない(表3)。

普及上の留意点

1. この成果は、樹齢16年生の中間台の側枝全てに高接ぎ(一挙更新)し、高接ぎ後5年までの試験結果である。
2. いずれの中間台とも、高接ぎ後は主枝の背部に日焼けを起こしやすいので「返し枝」をうまく利用して日焼け軽減に努めること。

表1 中間台品種の違いが「あきづき」の収量に及ぼす影響

中間台品種	1 樹当たり		1 果	樹冠占有	樹冠占有面積当たり	
	収量(kg)	収穫果数	平均重(g)	面積(m ²)	収量(kg)	収穫果数
豊水	146.2(88)	262	560(107)	34.22(86)	4.27(101)	7.64(94)
新高	166.9(100)	320	521(100)	39.57(100)	4.21(100)	8.09(100)

注) () は新高中間台を100の比率、データは高接ぎ5年目(結実開始から3年目)

表2 中間台品種の違いが「あきづき」の果実品質に及ぼす影響

中間台品種	果実径(mm)		平均	果肉	果皮色	糖度
	横径	縦径	果重(g)	硬度(lbs)		
豊水	(104.5)	(82.5)	(545)	(4.02)	3.88	13.63
新高	(105.1)	(83.7)	(553)	(4.20)	3.99	13.56

表3 中間台品種の違いが「あきづき」の生育に及ぼす影響

中間台品種	調査	発育枝	二次伸長		総芽数	腋花芽
	本数(本)	長(cm)	平均長(cm)	発生率(%)	(芽)	着生率(%)
豊水	188	66.4	29.0	58.9	37.8	19.8
新高	265	62.6	29.3	60.8	38.4	17.3